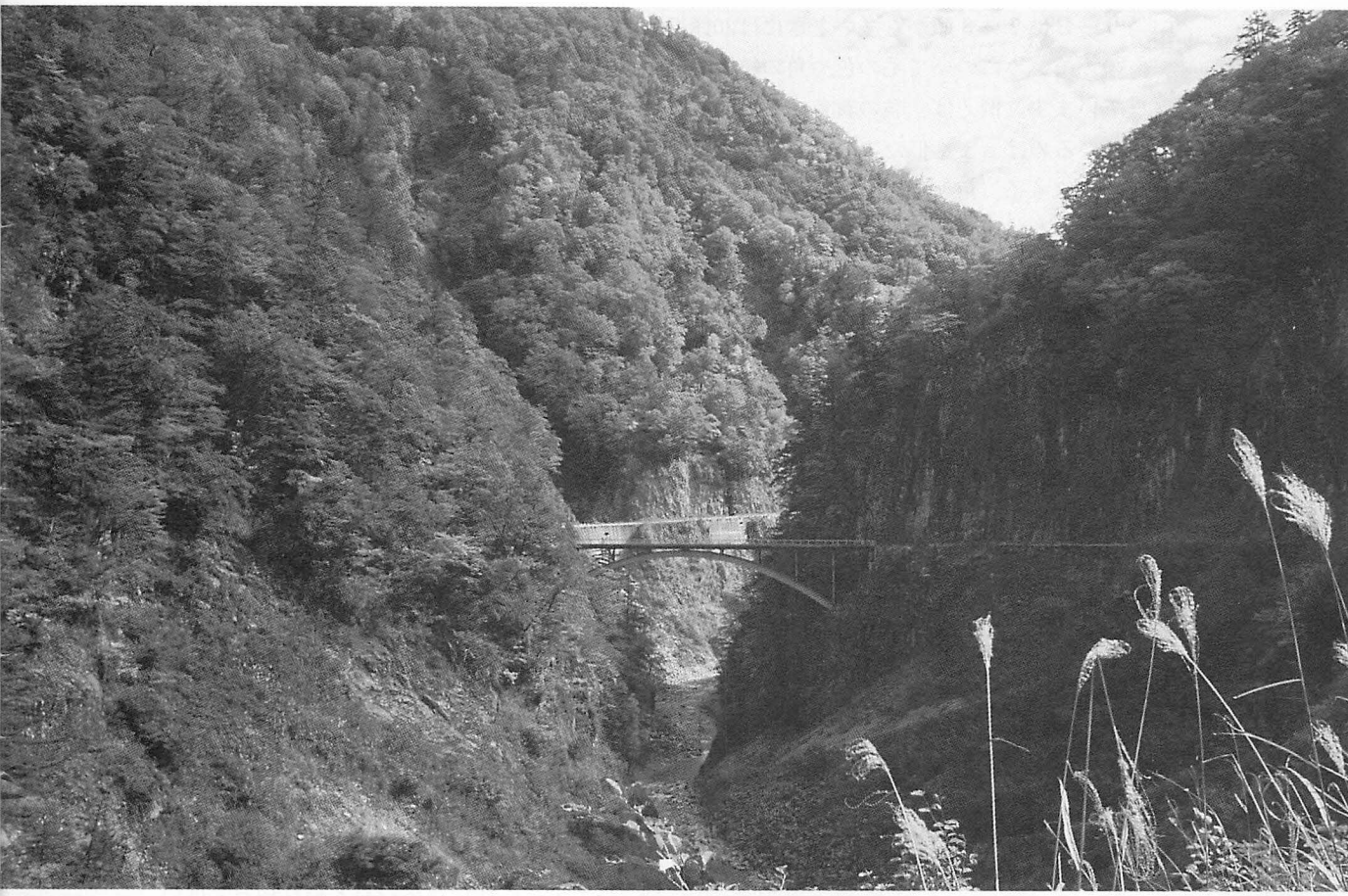
ISSN 0388－4732

石川県白山自然保護センター編集

はくさん

第15巻　第3号



吉野谷村中宮の蛇谷峡

吉野谷村中宮地内の蛇谷峡では、9㎞にわたる峡谷美や多数の見事な滝があり、その美しい景観によって村の名勝に指定されました（昭和46年11月3日）。蛇谷峡にはこの他に野生猿の餌付場や、昔の温泉源を利用した露天風呂が整備されています。
現在では、白山スーパー林道が開通し、夏休みや秋の紅葉時には多数の観光客が訪れています。

ブナオ山のニホンカモシカ

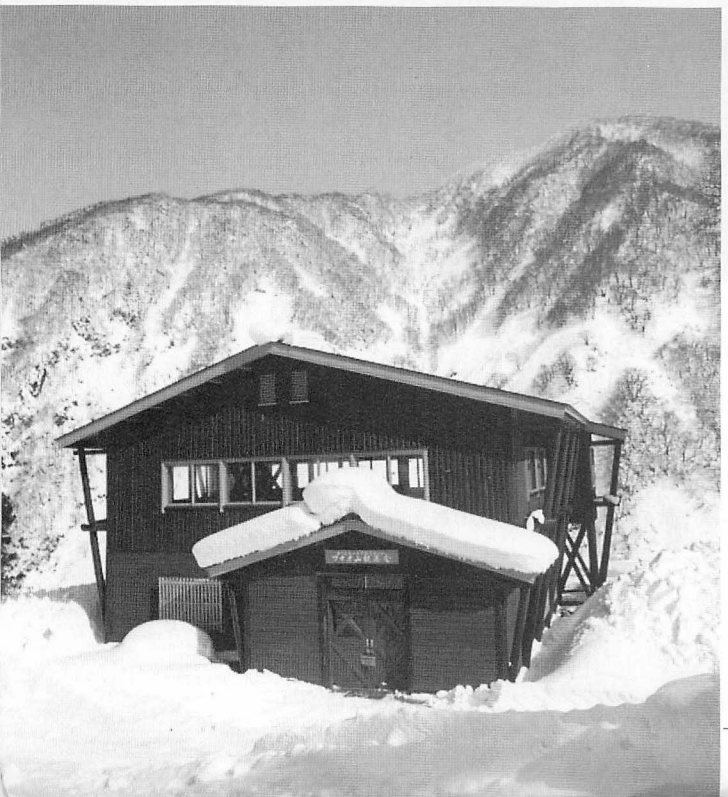
下家 智見

カモシカの名付け

石川郡尾口村尾添にあるブナオ山観察舎では、川向いのブナオ山斜面に約20頭、建物周辺や岩間道近辺をあわせると60頭近くが生息しているので、よほどの悪天候でない限り一日に７～８頭から多いときには20頭近くのカモシカを見ることができます。一頭一頭のカモシカについて毛の色や角の特徴を見つけ、それぞれにできるだけ単純な名付けをつけています。例えば、喉の黄色いのはオレンジ、年をとって口にしまりがなくなり下唇がでているのは、よく似た人の名をとって長さん、四肢が黒くてタイツをはいたように見えるのはタイ子、角と耳の間にコゲ茶色の十字が入っているのはキリスト、そのお母さんはマリア、首に大きな縞のあるメスはシマ、発電所の上にいるのはエレキ、という具合にほとんどのカモシカに名付けをつけています。

1985年の春、ブナオ山の正面を縦に貫くオオノマの谷を縄張りにしていたオスのオレンジは、最も親しくしていたメスのタエ子とその子供のハイチビを雪崩で失い、落ち込んでしまったせいか山頂近くのブナ林に移ってしまい、あまり姿を見せなくなりました。そのあとに、オオノマ付近から河原近くにいた父親の可能性の高いオスのスミ、メスのシマとその子シロチビが移ってきました。この一家もシロチビの子別れを境に一冬で姿が見えなくなってしまいました。

ブナオ山観察舎（背後はブナオ山斜面）



1986年の春は、観察中に目の前で三頭のカモシカが相次いで雪崩に流されて死ぬのを見ました。昔は赤い布などを振って踊り、カモシカの好奇心の強いのを利用した素朴な猟の方法がありました。このように好奇心の強い性格のために、雪崩が来てもじっと見ているだけで、結局命を落すことが多いのではないかと思います。これが自然の姿と割り切ってはいても、何とも気が重くて、しばらくは双眼鏡を覗くのがつらく感じられました。

しかし、ブナオ山では悲しいことばかりではありません。今年はカモシカの勢力範囲が少し変わったようで、しばらく姿を見せなかったオスのオレンジが今シーズン初めに、黒っぽいきれいなメスと肩から前が白くてオデコの可愛い子供を

角平行に近く、後ろに少し曲る
右が少し短い？

耳の下に
白い一文字

鼻すじだけ黒く見える

目の縁が白丸

名前　シマ　　♀成獣

角長く上開キに後ろに曲る

背線が太く黒い

薄いオレンジ色
伸び上ったのを
前から見ると特に目立つ

名前　オレンジ

角短かく見えない

おでこが可愛い

オレンジと再婚した奥さんとの間に
出来た子供♀？

角細く長い

体全体黒褐色

目の回り白い

オレンジの再婚した奥さん♀成獣

角なし

全体に薄汚れた白色

正面　角と耳の間に
鹿毛色の十字がある

下程黒くなる

飛節より下特に黒

名前　キリスト

角細く長い、後ろに強く曲る

時々首に薄い縞が見える
ことがある。

唇白く口角 L型に上へ曲る

名前　マリア　♀成獣

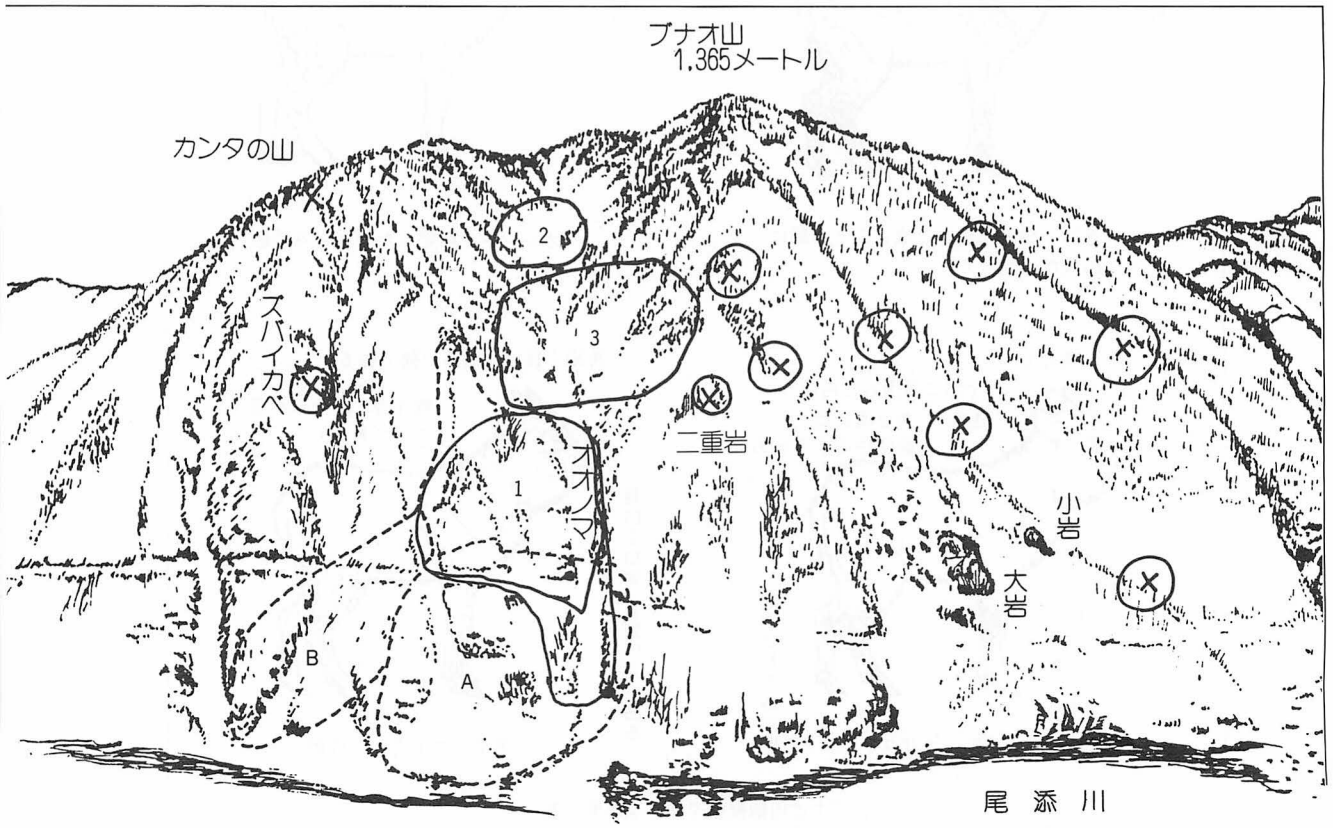
ブナオ山観察舎で見えるカモシカ

連れて、オオノマ中央の二重岩付近（以前の縄張りの真上）に移住してここを縄張りにし、元気な姿を見せてくれるようになりました。この親子にはまだ名前がなく、名付け親大会でもして、よい名前をつけてやりたいと思っています。また、子別れ後行方不明となったシロチビ一家のあとに入ってきたキリスト親子も、左側のズバイカベの旧道下まで斜めに縄張りを広げ、元気な姿を見せています。以前は足跡だけはあるのになかなか姿を見せないのでニンジャと名付けていたオスは、観察舎近辺で時々朝夕送り迎えをしてくれるようになりました。どうも出没にむらがあると思ったら、今年の春の子を連れたメスと一緒でした。なんとなくよそよそしく思われるのは、やはり人間にあいさつするよりも、自分の仲間に気をつかっているからでしょう。

子育てと子別れ

カモシカのメスは自分の縄張りを守り、子育てはその縄張りの中で主として母親が受け持っているようです。オスはそれに重なったやや広い縄張りを持つという観察もあります。採餌の方法、岩場やガレ場やクレバスなど危険な箇所を通行する要領、深い雪の中でのラッセルの仕方、縄張り内への侵入者を排除するときの闘争方法など、厳しい生存競走を生き抜くために必要なことは全て母親がやって見せた後、必ず子供に実行させます。

時にはいわゆる『シシの子落し』と思われる感動的なシーンを見ることもあります。春先、子別れに先だち母親が子供に対して総合的な卒業試験を行なうこともあります。岩や



ブナオ山に捷むカモシカたち（観察舎からブナオ山を望む）

木があり裸地やススキもある急斜面を、母親が300m位駈け降りてみせたあと、子供にも同じことをさせます。土煙が舞い小石が跳ねる様を見て、恐怖で尻込む子供を、母親はキッシング（キスのこと）や体触れなどで励ましたり、体当りをしたりして実行をせまります。母親は子供が実行するまで妥協せず、子供はこれに合格しなければ生きてゆけないから、厳しい愛のムチを振るっているのでしょう。子供がうまく駈け降りると『ごほうび』も大変で、母親は角の先から蹄の先まで舐めまわしたりキッシングや体触れを行います。厳しく危険の伴う試験に合格したのだから、ケガの確認も含めて当然のことと思われます。

カモシカの子別れは、ある日突然に子供をつき放すキタキツネや、子供を置き去りにするといわれるクマのイチゴ別れ（子グマがイチゴを夢中で食べている間に母グマが姿を消す）とは大分異なり、母親に次の出産が近ずく頃には前年の子も大きくなっていて、計画的に子別れの教育が始まるようです。シマとシロチビ母子の場合、子供がマーキング（臭いづけ）のエリアより外にでられない習性を利用して、母親が教育を行ないました。ある日、シマが河原の近くで特別ねんごろにマーキングをしていたと思っていたら、いつの間にかいなくなりました。母親のいないことに気付いたシロチビの慌てようはかわいそうなくらいで、マーキングにぶつかっては戻り、また母を探しますが、不安や悲しみの中で疲労と空腹に耐えかね、とうとうあきらめて採餌を始めました。すると、どこにいたのかシマがひょっこり姿を見せ、飛び付かんばかりに全身に喜びを表わすシロチビに、キッシングや体触れなどのごほうびをあげました。こうして、母親と別行動の時間を段々長くしていって、子供が不安、孤独、淋しさに耐えられるよう徐々に体験させているように見えます。

五月の初旬に全ての教育も終わり、厳しい冬を生き抜いたシマ・シロチビ母子のところに、ズバイカベにいた母カモシカが子供のピンク（シロチビのいとこ？）を連れてきて、シマに預けて帰りました。シマ、シロチビ、ピンクの三頭は小犬がじゃれるように遊んでいましたが、夕方シマはピンクを母親のところに送っていきました。家族以外との付き合いを教えるような一連の行為は、両方の母親が計画したお別れパーティーではなかったかと、後で考えました。その翌日を境に、シロチビもピンクも両親を残してどこかに行ってしまいました。

白山に勤務してブナオ山の斜面を眺め続けて六回目の冬を迎え、やや独断的な観察も少しは練れてきたとおもいます。観察を通じて感動しながら、巾広く奥の深い人生の縮図のような生き方をカモシカに教わったような気がしますが、その一部しか、ここで紹介することができなかったのは残念です。

（白山自然保護センター）

・オレンジの縄張りの移動
　1　雪崩でタエ子とハイチビを失うまでいた
　2　単独で移動
　3　現在3頭でいる
・スミ、シマ、シロチビ親子
　最初Aにいたが1（オレンジの後）
　へ移り、子別れのあと一冬いた。
・キリスト親子
　シロチビ親子が1から出たあとへ。
　AとBをも縄張りにする。Bへは
　他から2頭きているが喧嘩しない。
×――現在カモシカを観察できる場所

白山のニホンカモシカは害獣ではない

水野 昭憲

白山山ろくは落葉広葉樹に被われ人工林率が低い

ニホンカモシカによる農林業被害は、東北地方から近畿地方へかけての広い範囲に見られ、なかでも中部地方の太平洋側ではヒノキの若木の食害が大きな問題となっています。そのため植林地を防護柵でとり囲むなど、多大な経費と努力がはらわれています。それでも被害のおさまらない地方では、「文化財保護法」の特別天然記念物の現状変更と、「鳥獣保護及狩猟ニ関スル法律」の有害鳥獣駆除の手続きを経て、個体数調整が行なわれています。

岐阜県飛騨・東濃地方の被害多発地からわずか50km程度しか離れていないのに、白山では林業被害はほとんど話題となったこともありません。問題となっている地域では、食害発生のしくみや防止対策について数多くの研究や検討がなされてきたにもかかわらず、被害の少ない地域の生息環境や林業との比較はあまり行なわれきませんでした。ここでは、白山山系のカモシカによる被害を調査し、死体から得られた胃の内容物の分析結果と合わせて、多雪地帯において林業被害が少ないことについて考えてみました。

被害

白山山系のニホンカモシカの分布の広がりは、北は富山・石川県境の医王山まで、東は庄川右岸まで、西は石川・福井県境の大日山まで、南は密度が低くなるものの、福井・岐阜県境の能郷白山まで続いています。今回は、白山山麓の関係者に林業被害の有無を確認し、あわせてカモシカにより迷惑を受けたり、困ったりしたという話も集めました。

岐阜県荘川村と白川村からは、スギ植林地の被害が県統計の中に昭和52年以降、合計24ha約3400万円と報告されていますが、現地では大きな問題とはされていませんでした。石川県白峰村と吉野谷村でもスギの幼木の一部が食べられたこともあり

ます。しかし、樹幹の先を食べられたものは少なく、軽ければスギでは側枝が幹になる可能性もあるため、いずれも現在のところ大きな被害とは思われていません。

富山県西部の干柿の産地で、新たに植えたカキの新芽を食べられたと聞きました。近年までカモシカのいなかったところで、被害の程度も小さいということでした。畑作物を荒された話は、白峰でトウモロコシの葉、大野市打波川流域での栽培オーレン、吉野谷村、尾口村での栽培ワサビがありました。いずれも、実被害は小面積または少数であり、一時的なものであったため、関係者及び役場等が承知している程度で、対策を論じるまでに至っていません。

吉野谷村や金沢市で、山麓の水田をカモシカが踏み荒したという情報が白山自然保護センターに持ち寄られて調査したことがあります。何かに追われて林縁から走り出したカモシカが通過したのでしょうか、被害はその時だけで、稲は食べられなかったので、ほっとしています。

カモシカの食べ物を調べる

白山のニホンカモシカの食べ物を知るため、1974年から石川県内で拾得した死体の胃の内容物16個体分を分析しました。食べ物は第1胃から採集し、1㎜メッシュのふるいで水洗後、肉眼あるいは実体顕微鏡下で植物の種類と量を調べました。(表1)

積雪期に拾得されたカモシカ6個体のいずれの胃にも落葉広葉樹の枝先がみられ、量的にもほとんどが枝先と冬芽のものが多く、積雪期のカモシカの主な食べ物であることがうかがえます。針葉樹は、ハイイヌガヤ、スギ、ヒノキが出現し、落葉広葉樹の枝に次いで重要な食べ物といえます。なかでも、ハイイヌガヤを好んで採食していて、冬にこればかりを食べていたものも1個体あり、夏にも少量ながら見つかりました。

ササは、今回分析した食べ物からは、冬期に1例から出現したにすぎません。調べた標本は、チシマザサが多い地域のものですが、積雪期には雪の下になり、カモシカが食べられるのは、雪崩跡地や斜面にできた雪の割れ目にあるものに限られると考えられます。岐阜・長野両県の結果では、ササ類は冬期のカモシカの食べ物の20～30%を占め、冬の食料として重要であるとされています。しかしササは、山にある量がたいへん多いことを考えれば、必ずしも好んで採食しているわけではないという意見もあります。白山地域で年間を通してササがあまり食べられていないのは、そのためと考えられます。

冬の食べ物からは、常緑で林床にあるトク

表1　積雪期と無積雪期の食物の量段階別出現頻度

	死亡年月日	落葉広葉樹冬枝芽	広葉樹草本	広葉樹葉	針葉樹	常緑広葉樹葉	イカヤツネリグサ科	シダ類	ササ類	その他
積雪期	85. 2	III				I	II			
	86. 3. 9	II			II					
	74.	III								I
	80. 4.10	II	I		III	I		I	I	
	81. 4. 5	II	I		II					
	84. 4. 8	III			I		I			
	出現頻度	100	33		67	33	33	17	17	17
無積雪期	86. 4. 6		II				II	I		I
	85. 5.23		III				I	I		I
	86. 5.15		III				I	I		
	86. 7		I				III			
	86. 7. 3		III		I		I			I
	86. 8. 7		III							II
	88. 8.24		III				I			
	85. 9. 2		III							
	86. 9.12		III				II			I
	87.10.31	I	III		I		I			I
	出現頻度	10	100		20	0	80	30	0	60

注）広葉樹葉には広葉樹の若枝も含む。
III：胃内容物のほとんどを占めているもの。

雪の中のニホンカモシカ

ワカソウ、カンスゲ類などの葉も出てきました。このことは、カモシカが雪の多い季節でも、雪崩跡や雪の割れ目で緑の葉を求めていることを示しています。雪崩が原因で死亡した個体が冬に見つかる死体の半分にもおよぶことが、そのことを裏づけています。また、冬にカモシカの数や行動を観察していると、平坦地を避けて多くの時間を傾斜地で採食しています。

白山には、雪国に特徴的な、ヒメモチ、ヒメアオキ、エゾユズリハ、アカミノイヌツゲなど常緑広葉樹の低木が多く、これらが冬の重要な食べ物であろうと言ってきました。しかし、今回の分析では、常緑広葉樹のうちヒメアオキの葉が１例から出現したにすぎません。アカミノイヌツゲ、エゾユズリハには食痕がみられないこともあり、ハイイヌガヤなど常緑針葉樹に比べてこれら常緑広葉樹への嗜好性は低いと考えられます。

雪の無い季節の胃の中は、いずれも緑色をしていて、ほとんどが広葉樹と草の葉で満たされていました。これらが主な食べ物であることは間違いありません。全国の資料をまとめた報告でも、夏は落葉広葉樹や草の葉が主要な食物であるとされ、木の葉と草の葉がほぼ半々であるという研究もあり、今回の白山地域での結果もこれらとよく一致します。

夏の食べ物から、イネ科とカヤツリグサ科の草が高い頻度で出てきました。ほとんどイネ科植物で占められていたものも１例みられました。イネ科やカヤツリグサ科の植物のカモシカによる食痕は見分けにくく、過小評価されやすいのですが、比較的重要な食べ物なのでしょう。これらは、繊維質の供給源として重要であるとも考えられています。

なぜ林業被害が起こらないのか？

白山山系は、昔から焼畑と炭焼が広く行なわれていた地域です。その時代には、山深くに家屋があり、また住民は機会があれば野生の動植物を採取して生活していたことでしょう。昭和20年代のカモシカ分布は、白山の亜高山帯近くで特に急峻な地形で焼畑や狩猟に入れない区域に限られていました。昭和30年に特別天然記念物に指定され、昭和34年頃に全国的に強い密猟取り締まりが実施されてから保護が徹底してきました。ちょうど同じ頃から、山中での炭焼きが衰退し、土木事業等に現金収入の職が増えたことにより、人びとは低地の本村に下り、炭焼・焼畑地帯が放棄される結果となりました。

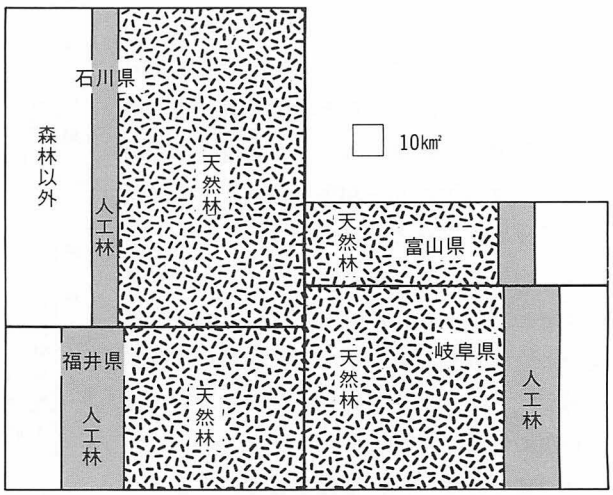


図１　白山カモシカ保護地域を含む市町村の森林面積

そこは、草原やかん木林などの、カモシカにとって極めて食物の多い植生に変りました。急斜面は草原に、緩斜面ではミズナラ・リョウブ・カエデ類を中心とする落葉広葉樹林になっています。これらのことを背景に、昭和40年代からカモシカの数が増加し、生息地が拡がったというのは、地域住民の大多数に共通する意見です。

落葉広葉樹林と草原がモザイク状になった白山に住むカモシカにとっては、春の若草と夏から秋に木の葉の採食に苦労することはないでしょう。一方、冬は落葉広葉樹かん木の小枝や芽を中心に、林床の常緑植物の葉も採食しています。ハイイヌガヤ、カンスゲ類等は、雪の下で乾燥と寒風から守られた冷蔵状態にあり、温かい日に斜面の雪の割れ目や雪崩跡に表われて採食可能となります。これらの緑の葉は冬でも軟らかさと栄養価を保存していて、草食動物にとって重要な食物となっています。こうして見ると、多雪地であっても、カモシカが一年を通して、極度の食物不足には陥ることはないとも想像できます。

長野県、岐阜県の被害地で捕獲した冬のカモシカの胃内容物を分析した報告によると、針葉樹の占める割合が19～43%であり、ほとんどがヒノキであったとされています。調べられたカモシカがヒノキ植林地周辺で捕獲されており、採食可能なヒノキが多量にあったためと考えられます。白山のカモシカでは、ヒノキが1例から出てきたにすぎません。

白山地域の林業の状況はどうでしょうか。多雪のため林業は思うようにならず、人工林率は低く（図1）、造林実績を見ると、スギがほとんどで、比較的雪に弱いとされているヒノキとアスナロ（アテ）は少ししか植えられていません（図2）。今回の標本の多くはスギ人工林の混在する地域から得られたにもかかわらず、食物からスギが出たのは1例にすぎません。カモシカは、ヒノキなどに比べて針状で硬いスギを好まないものと考えられています。しかし、北陸地方でも低山や能登半島などの雪の少ないところではヒノキやアスナロの植林が行なわれていて、将来カモシカの分布が大きく拡がった時には、植林木の食害が発生することは十分考えられます。

被害情報でもわかるとおり、造林地でスギが食べられていることは知られています。また他の地区でも、造林地で調査すれば、カモシカの食痕があり、採食を観察することもあります。しかし、食べ物が最も不足しがちな積雪期には、スギ幼木の多くは雪の下になっています。食痕のみつかるのは、多くは雪の上に出ているスギ亜高木の下枝の先端です。下枝の一部を食害されたとしても、林業的立場から被害が出たと腹を立てることはないでしょう。これらの点も少雪地のヒノキ造林被害の多発地帯との差と考えられます。

（白山自然保護センター）

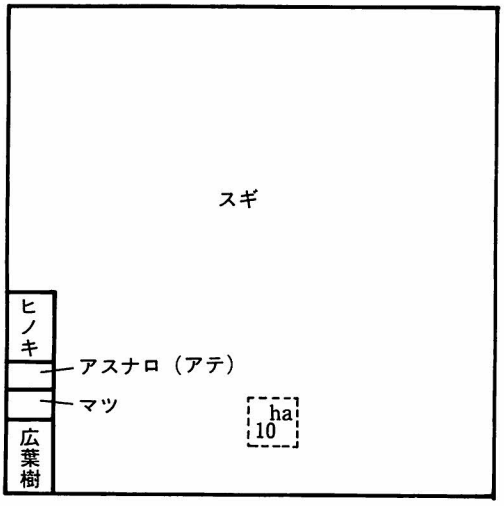


図2　石川県内カモシカ保護地域を含む市町村の樹種別造林面積（昭和55—59年度）

白山カモシカ
保護地域と調査

田川匡士

白山に生息するカモシカは、正確にはニホンカモシカ(*Capricornis crispus*)と称し、日本に固有のウシ科に属する大型哺乳類である。かつては、食用並びに毛皮用として利用価値が高い日本の代表的な狩猟獣であった。北海道を除く全国各地の山岳地帯に生息するが、大正から昭和初期にかけて、捕獲のために激減し、『幻の動物』とまで言われた。

このため、その保護対策として、大正14年に狩猟対象獣から外され、さらに昭和9年には天然記念物に指定、同30年に特別天然記念物に指定された。天然記念物の指定は文化財保護法によるものであり、以降カモシカの保護は国では文化庁が、県では教育委員会が担当してきている。指定には生息地を定めるものと、種を定めるものがあり、カモシカは地域を定めない種の指定であり、全国どこにいても特別天然記念物として扱われ、わが国では最も強い保護がなされてきた。

以上のような法的規制と密猟防止の強力な行政措置が効を奏し、その後、個体数は徐々に回復がみられ、近年では、比較的低い丘陵地に出没するまでに増加している。法的な保護策による人々の意識変化は無論だが、山村地域の交通手段の発達に伴う食糧事情の変化が、捕獲の減少に寄与してきた側面も考えられる。

このような情勢の中で、中部山岳を中心として一部でカモシカが若芽を食べたり、農作物を荒らすなどの被害が発生し、林業家から文化庁に対し損害補償が提訴されるなど、社会問題となる地域が現われた。その対応について昭和54年、文化庁、環境庁、林野庁の関係3庁において協議を行い、次のとおり合意した。

① 保護地域を指定し、カモシカとその生息環境の保全をはかる。

② 保護地域外については、個体数の調整を含む適切な保護管理を実施する。

この合意内容に基づき、文化庁においてカモシカの生息状況を把握したうえで、適切な保護管理施策を立てる方針が決められ、全国で10数カ所のカモシカ保護地域（地区指定の前段となる地域）が順次設定された（図－1）。

この保護地域の実態把握の方法として、毎年行う『通常調査』と5年に1回の『特別調査』が企画されている。該当県の教育委員会を事業主体とする国庫補助制度が作られ、石川・岐阜・富山・福井4県は合同で白山カモシカ保護地域の特別調査事業を昭和60、61年度に実施した。県境を越え、自然環境やカモシカの分布は連続したものだという考え方に基づいた調査は、他の動物を含めても前例がなく、当初その調整に苦労が多いかと心配したが、各県の熱意により予想以上に順調に終了した。調査の実施にあたり、石川県文化課は県白山自然保護センターに依頼し、他県では㈶日本野生生物研究センターに委託する方法をとった。自然保護センターの存在と日常の調査研究の蓄積が大きく寄与し、また、白山カモシカ保護地域の61.7%は石川県に属することもあって、同センターに全面的に協力を

○設定が完了した地域……

①下北半島地域（56年３月設定）

②北奥羽山系地域（59年２月設定）

③北上山地地域（57年７月設定）

④南奥羽山系地域（59年11月設定）

⑤朝日・飯豊山系地域（60年３月設定）

⑥越後・日光・三国山系地域（59年５月設定）

⑦関東山地地域（59年11月設定）

⑧南アルプス地域（55年２月設定）

⑨北アルプス地域（54年11月設定）

⑩白山地域（57年２月設定）

⑪鈴鹿地域（58年９月設定）

⑫伊吹・比良山地地域（61年３月設定）

○現在準備中の地域……

⑬紀伊山地地域

⑭四国山地地域

⑮九州山地地域

図１ カモシカ保護地域設定状況

いただいた。なお、石川県自然解説員、学校の教員等10名を聞き取り調査員に委嘱し、広くカモシカの分布や被害の情報収集にあたっていただいた。調査項目とその結果は以下のとおりであった。

1．生息環境調査

(1)地形　保護地域は、ほぼ標高400m以上あり、中央部にわずかにゆるやかな部分があるが、各河川流域の強い谷地形に取り囲まれた、全体として急峻な地形である。

(2)気候　冬季の積雪深が山麓部で2～3m標高1,800mまでは5～7m同2,400mまでは14m以上と推定される多雪地域である。

(3)土地利用　表土の改変を伴うものは少なく、高地を除き森林率が高い。車道の密度は低く、急峻地につき今後とも利用が急速に進む可能性は少ない。

(4)植生　ブナ林が全体の半分以上で、次いでダケカンバとミズナラが多い。

2．生息状況調査

(1)分布　カモシカは、昭和20年代には亜高山帯からブナ帯上部に散在していたが、今回の調査では白山山系全域に分布していることが分かる。

(2)密度　亜高山帯から下の冬期の平均密度は1㎢当り4～6頭と推定される。

また、保護地域内では1,400～2,000頭が生息していると推定される。

3．個体群動向調査

(1)死亡個体の記録　1971年～1986年の間で死亡110件、負傷13件であった。

(2)形態計測　52例の平均体重37.3kg平均頭胴長は119cmであった。

4．食性・食害調査

(1)食性　無積雪期は、広葉樹の葉や広葉草本を主に食べており、冬期は落葉広葉樹の小枝を主に食し、ハイイヌガヤなどの針葉樹を補助に食している。

(2)食害　林業被害は皆無ではないが、被害の質、量ともに極めて低く、問題にはなっていない。

（註）白山山系に食害の少ない理由として、①急斜面に発生する雪崩跡などで冬期でもカモシカの餌があること、②他地域で食害をよく受けるヒノキの植林が当地域では少ないこと、などがあげられた（詳細は本号6ページの記事参照）。

以上のような特別調査の結果をふまえ、62年度からは通常調査に入っている。この調査には各県に10名のカモシカ調査員を委嘱し、分布・密度・被害などの変化を継続して追跡できる体制をとっている。

白山に棲むカモシカは安定した状態にあって、自然と人間との間で極めてバランスが保たれている。これは、全国のカモシカ生息地域の中でも特筆すべき状況だと思われる。白山のカモシカは、現在では保護地域の線上に多く、いわばドーナツ状に分布し、地域の線引外にもかなり多数が生息していると想像される。今後、文化庁においては、全国の調査結果を検討し、保護地区の指定を数年先に予定しているが、白山においては、この地区以外のカモシカをどう保護していくかが最大の問題点と考えられる。食害の多発している他の地区と同様の画一的な線引や保護対策は、この良好なバランスを崩すことにもなりかねない。生きた文化財の保護と林業活動の調和をどのように図っていくか、慎重に検討されねばならない。（石川県教育委員会文化課）

最近のトピックから

白山公開講座

10月２日（金）に尾口村一里野において、白山自然保護調査研究会（会長：紺野義夫金沢大学教授）と白山自然保護センターの主催により、日頃の研究成果を一般の方に広く知っていただくための報告会－白山講座－が開かれ、約80名の参加者がありました。

同研究会は白山地域で調査活動を行っている26名の研究者で構成され、動物・植物・地質・人文各分野で、これまで20年にわたって数多くの業績をあげています。また当センターの調査研究活動に対して様々なアドバイスもいただいています。こうしたこともあって、同研究会の最近の研究成果を多くの人達に知ってもらうことを目的として、下記の講師とテーマで白山講座を開催しました。

講師・テーマ	内　容
・桑島『化石壁』の最近の話題 松尾秀邦（愛媛大学教授）	◇1985年に桑島で産出した植物化石(*Nilssonia nipponensis*)は複葉型を示すと思われ*Nilssonia* 属は被子植物の先祖の一つである可能性がある。
・今、白山の高山植物は？ 菅沼孝之（奈良女子大学教授）	◇室堂付近での実験結果から、13年間に15％前後の植被率の増加があり、優占種はヒロハノコメススキであった。
・ニホンザルの群れの分布とその増加 滝澤均（富山市ファミリーパーク公社）	◇白山麓で現在確認されているサルの群れは15あり、20年間に 4倍に増えた。今後とも個体数や群れの数は漸増傾向にある。
・白山麓の人々の動物観－動物からのメッセージ 広瀬鎮（名古屋学院大学教授）	◇白山麓にはニホンザルの狩猟や薬用に関する伝承が多く残されている。また、地域住民の動物観も明らかになった。

白山講座の会場。
（尾口村一里野「天領」にて）

白山麓の民具教室――3

伊藤　常次郎

ナギガエシの儀礼(1)――その概観

白山を源とする手取川の支流の大日川上流に、小原という戸数僅か37戸の集落がありましたが、ダム建設のため昭和34年に全戸水没し、住民は第二の故郷を求めて立ち去りました。この小原には、『ナギガエシ』という儀礼が明治中頃迄伝承されてきました。民俗資料の収集作業を進めていた際に、ナギガエシに関係する数点の民具に接したのがきっかけとなり、古老達の指導を受けたり聞き取りをしたりして、昭和52年と54年にこの儀礼を再現することができました。そこで今号と次号では、ナギガエシの儀礼や民具について紹介してみたいと思います。

石川県の能登地方に伝承される、田の神様の収穫儀礼のアエノコトに並行するように、白山麓の小原の焼畑耕作農民の間でも、一年間のしめくくりの収穫祭としてナギガエシの儀礼が伝承されました。古老達の話によると、昔は村落共同体の催物として、上神様（ウエカンサマ）の拝殿や拝殿前の広場で行われてたといいます。嘉永年間（1850年前後）の頃から、各家庭で施行されるようになったもので、ここで述べるのは個人の家で行われたものです。

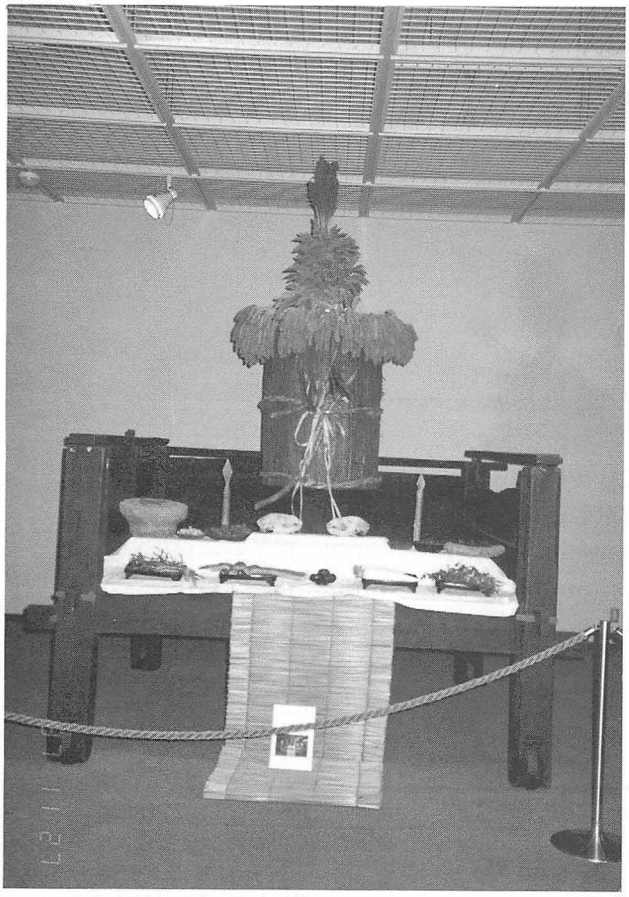
ナギガエシは、丁度初雪の降るころの山祭り当日（十二月九日）若しくはその前後に行なわれ、その一か月前から準備されました。ナギガエシの儀礼の進行過程は、①リンゾウ（輪蔵）作り②御神体（クマの頭骨）③松飾り④ソナエモン（供物）⑤アカリアゲ（燈明）⑥カエシダネ（返し種）⑦イサゴ（一三五）⑧カンダネ（神種）⑨オツトメ⑩ウケダネ⑪トシウラナイ（年占い）⑫ヨビシ⑬ツトヒキ⑭アカリサゲ、の14項目に分けられます（各項目の詳細については次号）。ナギガエシの行事の中心となるのは祭壇作りで、祭壇の骨格となるアマボシダイとその中央に設けられるリンゾウ作りが基本となります。このリンゾウは、越冬用の主食であるヒエ・アワ・カマシ等を保管した道具で、レンゲウスの上辺の外周をスギまたはコクルミの皮で覆って筒状にし、外側をネソまたはブドウズルで堅く縛り、中に前記の穀物を 3～5 俵分収納しました。レンゲウスにはネズミ返しの部分があるので、安心して穀物を保存できました。アマボシダイは焼畑で収穫したヒエやアワをイロリの上で乾燥させるための道具で、いずれにせよ、アマボシダイとリンゾウは焼畑耕作に深くかかわる民具で、大変興味があります。

また、山の神の使者として熊の頭骨を雌雄一対飾り、これが祭壇の主体となります。アマボシダイの竹簾の上には、アラムシロ（新品のムシロ）または一石俵という特製の長い俵を置いて前面にまで垂れ下げ、その上に御神体の熊の頭骨を飾ります。その側面には各種のタカチョウシ（酒器のこと；15巻１号参照）を配置し、前側には、施主から招待され

た客が持ち寄った山の幸（里芋、大根、人参、ゴボウ、大豆、クルミ、カヤの実、山芋など）を供えます。大根・人参・山芋などは、できるだけ又状になったものを供えたとされています。なお、供物に関しては七品目に限定されています。その理由として、小原地区では焼畑を同一の畑（ムツシ）で六年間行い、一枚の畑に六年間お世話になったことから六品目の野菜を供え、山の神様に対するお礼としてもう一品追加して、合計七品目になったそうです。

このようにして、施主側が前日にアマボシダイを使って祭壇をしつらえ、招待客が持参した供物で一応の形態は整うわけです。前記のリンゾウの中には、キビ・ヒエ・アワの穂が差し込まれますが、これらはいうならば神様の持ち種であり、カンダネと呼ばれています。一番高く立っているのが神の代理とされるタカキビ（高粱）、次に男性を表わすヒエ一番下に沢山垂れているのが女花というアワの穂で、これらの種子はナギガエシの儀礼が終わった時点で、施主が客達に配って、持って帰ってもらうことになっています。この種は神様から頂戴したものであるから来年も豊作間違いない、と信じて次の年の焼畑耕作に使用します。なお、リンゾウの外周を円筒状に覆うスギ皮をネソ等で縛る場合、一本は右から回し、もう一本は左から回して結びつけますが、これは男女両性の結びつきにかかわることゆえ、きちっとするよう古老達からやかましくいわれたものです。このように、ナギガエシの儀礼に当っては男女両性にまつわる資料があり、子孫繁栄を願うとともに、多量の収穫を祈念する象徴となっています。

（民具研究家）



ナギガエシの祭壇（石川県立歴史博物館蔵）

アマボシダイの上に，各種供物がある。中央部には，レンゲウスの上にリンゾウを置き，穀物をさしている。また，雌雄一対のクマの頭骨や野菜がある。

たより

当センターの中宮展示館は11月9日から閉館しました。夏の間、連日餌付け場に出てきた野生のサル達も、秋の木の実の季節には山へ帰り、今ごろは厳しい寒さに耐えていることでしょう。来年の春に展示館を再開するころには、彼らの元気な姿を再び見ることができると思います。

一方、冬の野生動物の姿を見ることができるブナオ山観察舎が、今年も11月20日にオープンしました。カモシカやサルの冬の暮らしぶりを手軽に観察できる施設として、昭和56年に開館して以来、多くの人に楽しんでもらいました。今年もたくさんの方の御来館をお待ちしています。

今回の「はくさん」は、その食害が全国的に話題になっているニホンカモシカについて特集を組みました。本県では幸いなことに、カモシカによる林業の被害はそれほど出ていません。そうしたことも交えて、カモシカの生態や保護策について、水野昭憲・下家智見（いずれも白山自然保護センター）・田川匡士（県教育委員会）の各氏に紹介していただきました。また毎号連載の民具教室では、全国的にも珍しい『ナギガエシ』の儀礼について紹介していただきました。

10月24日・25日に、県立白山ろく少年自然の家と共催で、「秋の自然観察会」を開催しました。ブナやカエデなどの美しい紅葉を見ながら、特別天然記念物「岩間噴泉塔群」まで歩き、秋の山を楽しみました。

10月5日付で当センターの所長が代わりました。佐藤静前所長は県厚生部高齢者対策課長に転任し、後任には澤口良雄が着任しました。

目　　次

表紙　吉野谷村中宮の蛇谷峡……1

特集　白山ろくのカモシカ

ブナオ山のニホンカモシカ……下家　智見……2

白山のニホンカモシカは害獣ではない……水野　昭憲……6

白山カモシカ保護地域と調査……田川　匡士……10

白山講座開催　……13

白山麓の民具教室……伊藤常次郎……14

はくさん　第15巻　第3号（通巻65号）

発行日　1987年12月25日

発行者　石川県白山自然保護センター

石川県石川郡吉野谷村木滑

〒920-23　Tel　07619-5-5321

印刷所　株式会社　橋本確文堂